

氏名(本籍) 小笠原 真 (愛知県)
 学位の種類 文学博士
 学位記番号 乙第22号
 学位授与の日付 昭和59年1月18日
 学位授与の要件 学位規程第3条第2項
 学位論文題目 西欧および日本における資本主義精神の成立
 —比較思想史研究—
 論文審査委員 (主査) 文学博士 池田義祐
 教授
 (副査) 教授 訓覇暉雄
 (副査) 文学博士 北西弘
 教授
 (副査) 追手門大学 教授 豊嶋覚城

学位請求論文要旨

明治以来、日本の急速な近代化、その内実の主要なる部分をなす資本主義社会の成立と発展について、それを支える資本主義精神の成立過程を先進西欧諸国と対比しつつ、比較社会学の立場から究明せんとするのが、この論文の主題である。そのために筆者は、先ず内・外の諸学者によってなされている近代化論一般、および日本近代化論一般を考察し検討する。次いで先進西欧諸国における資本主義精神の成立についての代表的な諸学説を詳細に分析し考究している。次にこの論文の主題である“わが国における資本主義精神の成立”に関する諸家の見解を綿密に批判検討し、最後に筆者自身の見解として明治以降における“ナショナリズム”と“^{イデオ}家の觀念”とが、相互補完的、相互規定的な形で日本の近代化——資本主義化の核となる価値体系であると主張している。筆者は、以上の如く極めて広汎な視野の下に内・外の文献を博く涉獵し、現代日本社会学の重要な問題の一である“日本近代化論”に独自の総合的な研究を試み、注目すべき成果を挙げているものと思われる。

〔論文内容の要約〕

この論文は四部九章よりなり、全部で千枚（400字詰原稿用紙）を超える大部のものである。第一部は、この論文の序論にあたり、「西欧および日本における資本主義の成立に関する研究のための前提」と題され、そこでは近代社会の客観的現象の分析を通して「近代化」の属性・規準を設定しようとする所謂「客観的アプローチ」と、人間の意識の変革・価値意識・人間観を基盤ないし軸として、そこから「近代化」を問おうとする所謂「主体的アプローチ」の二種があるとされる。そして「客観的アプローチ」が「近代化」を外から見ようとするのに対し、「主体的アプローチ」が逆にそれを内からつまり社会についての人間の意識の側面から見んとするものであって、筆者の研究のテーマにとっては、この両者のうち特に「主体的アプローチ」が重要である点を示唆し提唱している。次いで第二部では、比較の対象である西欧における資本主義精神の成立の問題がとりあげられている。即ち第二部第一章において筆者は、所謂西欧における「資本主義起源論争」の一方の論陣を張る、西欧における近代化——資本主義化の核となるべき価値体系をルネッサンス的解放に求める諸家の説（解放説）を、特にその代表的な人物としてのL.ブレンターノ、W.ゾムバート、A. v.マルティンの所論を通して吟味する。第二部第二章では、筆者は論争の他方の論陣を張る、前述の価値体系を宗教改革的禁欲に求める諸家の説（禁欲説）を、その有力な人物としてのM.ヴェーバー、E.トrelloチそのほかK.マルクスの所説を通して明らかにする。そしてそこでは、従来ともすれば西欧における「資本主義論争」に加わった研究者達の所論の取り扱い方が、例えば「解放説」をL.ブレンターノに代表させ、又「禁欲説」をM.ヴェーバーに代表させるといったように、それぞれ一人の所論のみが重点的に捉えられてきた傾向を批判して、筆者はこの論文において、より広く、それぞれの説を主張し支持する研究者を三人まで選び、学説史的経過のなかに「解放説」および「禁欲説」がそれぞれどのように修正もしくは発展させられているかを究明している。特に「解放説」の場合、これまで見逃されがちであったA. v.マルティンの所論に注目してこれを詳細に考察している点と、また「禁欲説」においてもM.ヴェーバーを中心としながらもそれを補う意味でE.トrelloチ及びK.マルクスの所説を検討している点など、筆者の新しい見解として注目に値する。

統いて第三部で筆者は、日本における資本主義精神成立の問題を、第二部

でとりあげた西欧における「資本主義起源論争」に加った諸家（特に「禁欲説」）の所説との関連で、比較社会学的分析を通して論究している。そのうち第三部第一章において筆者は、日本における近代化——資本主義化の核となるべき価値体系を、わが国の伝統的文化、特に宗教及びその他の文化に求める諸説を検討する。即ち日本の仏教、儒教、石門心学およびキリスト教（新教）に求める諸説を考察し検討する。その結果、筆者はこうした見解に対して消極的な評価を与えるにとどまり、それらの社会的機能や影響力が西欧におけるキリスト教（新教）に比して微弱であった事、逆に宗教その他が国家権力によって影響された事等を理由としている。第三部第二章で筆者は、ルネッサンスも宗教改革も経験しなかった日本では近代化——資本主義化の核となるべき価値体系が欠如しているという、所謂「欠如理論」を内・外の諸学者の所論を通して検討している。この「欠如論」に対して筆者は、西欧における個人の内面的規範としての禁欲精神の機能を代行したと思われるものに「国」および「家」の「共同体成員」としての外的規範に基づく禁欲的精神があって、それが日本の近代化——資本主義化、なかんずく資本主義精神の成立・発展に大いに寄与したいという仮説を提唱している。

最後に、この論文の主要部分をなす第四部では、第一章において日本における近代化——資本主義化の核となるべき価値体系を日本のナショナリズムに求める筆者の考えが展開されている。そこで先づ筆者は、近代日本における資本主義の成立・発展の背後に潜むナショナリズムの問題を内・外の諸説を参照しつつ、特にW.ロストウ、G.ラニス、J.ヒルシュマイヤー、B.マーシャル等の欧米のジャパノロジストや、日本の阪口昭、武藤光朗、野田一夫、東畑精一等の諸論を詳細に分析し、参考にしている。

その結果、筆者は近代日本（特に明治前期を中心とする）における資本主義の成立・発展の背後に潜む有力な動因としてのナショナリズムの実態を解明している。

第四部第二章において筆者は、日本における近代化——資本主義化の核となるべき価値体系を所謂、日本独自の“家の観念”に求める自己の見解を明らかにしている。先づ“家の観念”が日本の経済（資本主義経済）に果した重要な役割を主として労働力の供給と資本蓄積の両面から検討し、そのことによって日本の近代化——資本主義化の支柱としての“家”的意識の問題について解明している。次に「家」の擬制としての経営家族主義が日本におけ

る資本主義の重要な側面を形成していることを、筆者は従業員の高い帰属意識と労働意欲との源泉となっていること等を挙げて実証的に指摘している。第三に筆者が指摘し論述しているのは、「家」を中心とする共同体の期待を背負う立身出世主義である。日本の立身出世主義は、“家名を誉げる” “郷党のほまれ” 等の表現から知られるように個人の立身出世が常に個人の背後にあって彼を見詰める「家郷」の期待によって支えられ、かくしてそれは「家」を中心とした共同体の期待を背負うことを意味した。そして西欧の一瞬の懈怠が地獄に通じるというカルヴィニズムの教義が内面からの良心の監視の下に強迫的に人を駆り立てたのに対して、日本の教えは外部からの他者の眼が強迫的に駆り立てる力をもっていた。それ故積極的には前者はいわば「原理の意識」、後者はいわば「期待の意識」によって導かれ、消極的には前者はいわば「罪の意識」、後者はいわば「恥の意識」によって脅かされていた。近代西欧には超越神への内面化された信仰があり、近代日本には家郷に錦を飾るという現実の動機があってそれぞれの資本主義精神成立の源流の一となっていた。このような主として西欧の禁欲説との比較を通しての分析によって筆者は「家の観念」が西欧のプロテスタンティズムにはない独自の強力な原動力として日本の近代化の精神——資本主義精神の成立に寄与していると説いている。

〔論文審査の要旨〕

現代、欧米以外の世界において、ただ日本のみが近代化に成功していること、特に第二次大戦後、敗戦直後の焦土から立ち上って急激に発展しているその驚異的な高度資本主義化の現実を、内・外の社会学者達をはじめ、多くの人々が注目し、これをさまざまな角度から研究し多くの業績を生んでいる。筆者はこの論文において、それらの夥しい研究成果を社会学の立場から取捨選択しつつ、一応組織的かつ体系的に整理し、その上で自己の見解を明らかにしている。その努力は多とされるべく、又その見解は、この重要かつ困難なる問題を解明する上に、一の独自の立場を明らかにした点、十分評価に値するものである。ただ筆者が自己の立場から、なお明らかにすべき点として、ナショナリズムと家の観念とのより詳密なる機能関係や両者の媒介項としての地域共同体と両者の関連についての問題が残っており、更にこれらすべての点について実証的研究をより積極的に遂行すべき点が指摘できる

であろう。しかしながら、それらの点はこの論文全体の価値をいささかも減ずるものではなく、又今後の筆者の精進によって十分補充されうるものと思う。以上の如く審査した結果、この論文は文学博士の学位に値するものと判定する。

〔最終試験及び語学試験の結果〕

この論文及び関係事項について審査員全員がなした口頭試問、並びに審査員二名による語学（英語・ドイツ語）試験の結果、筆者は学位規程の定めるところに必要な学力を有するものと確認された。